

逃 避 行

粕屋郡古賀町

野中 トウ

故郷の佐賀を後にして、南満州鉄道社員である夫の勤務地、当時の満州黒龍江省齊齊哈爾に着いたのが、昭和17年9月8日でした。

当地も戦時体制下のもとに生活物資は厳しい統制にあって、庶民は耐乏生活に甘んじていましたが、それでも平和な生活でした。

19年4月に長男が生まれ、20年3月には夫が朝鮮の羅津へ出張です。よほど緊急な要務とみえて早急な出発でしたが、3ヶ月後の6月下旬には無事任務を終えて帰宅しました。8月4日、長女を出産して産褥に臥していたところに、9日、ソ連の参戦で夫に軍からの召集令状なのです。私は直ちに褥を片づけ、「私達の事は心配なく軍務に就いて下さい」と励ましたら、夫は「くれぐれも身体に気をつけて子供を頼む。自分はいずれ戦死する。内地に帰国出来たら、勇敢に戦死したと親族の人達に伝えてくれ」と言い残し、悲壮な面もちで入隊しました。

11日、隣組長さんから「齊齊哈爾も危ないので、南満州鉄道社員の家族は南下することになった。明朝避難列車が出るので、それまでに最少限度の荷物を持って待機しておくように」との伝達により、翌早朝、長男を背に、長女を抱き、オムツを入れた鞆を手にして局前広場へ行きました。広い広場も避難者の群で一杯。そのうち急に空襲警報の発令です。すると、今まで隊列を組んでいた集団は、まるで蜂の巣を突いたように我れ先にと防空壕へ走って行きます。私は長男を降ろし長女に授乳中で、皆さんのように素早い退避行動がとれません。やっと近くの防空壕へ行ったが一杯。次も満員。右往左往したがどこも駄目。敵機は執拗に旋回するし、警報は喧しく鳴り続ける。途方にくれ、夫も戦死することだし「三人一緒に死のうね」と、まだわけも解らぬ長男に話しかけて芝生の上に居座りました。が、夫が入隊する時に「子供を頼む」という一言がよみがえり、自分はどうかあれ子供だけは守らねばと決意して立ち上がった時、空襲警報が解除になりました。

やがて避難列車はハルピン方面へ向いましたが、各駅で長く停められ遅々として進みません。そのうちある小駅で待避していた時、車窓に体を乗り出して万歳万歳と連呼している兵隊さんに乗せた軍用列車が到着したので、何かと不審を抱いていたところ、無条件降伏とのことで、かの日本兵は朝鮮系の人達だったのです。避難列車はここから逆戻りして17日齊齊哈爾に帰って、元の社宅に入ったところへ、隣組長さんから「札蘭屯の避難者金子さん家族5人と、昂昂溪の田口さん家族6人」の受け入れを申し渡されました。私は6畳の間2部屋を提供し、我が家族は4畳半の部屋を使い、3家族の同居生活を始めました。夫は18日、無条件降伏、終戦、召集解除で意気消沈して帰って来ました。

戦後進駐して来たソ連軍兵士の凶悪事件。それは筆舌に尽し難い、不安と恐怖に怯えたものです。その上、現地の住民からの迫害です。長い間、軽視されてきたあの方達にすれば、反日

感情は無理もないとは思いますが。それにしても事もあるうに、あの優しい私たちの江崎局長さんを殺害したのです。全くもって、ひどい事でした。その悲報を聞いた時の強い衝撃、そして犯人に対しては激しい怒りを覚えたものです。夫は9月下旬、ソ連軍によって楡樹屯へ連行され、半年間も帰って来ません。後に残った女・子供は、生命の不安もさる事ながら、毎日の食生活の不安も深刻なものです。既に幾ばくかの貯えていたお金も無くなり、着物や調度品も食料に早替わりです。やがて治安も良くなってくると、露地のあちこちに闇市が立ち、人出で賑わって来ました。私達もそれに習い、場所を選んで乾麺や石鹼類、さらにパン、饅頭等の品を揃え、その収益で細々ながら暮して行きました。

21年3月、ソ連軍が本国に引揚げ、代って八路軍の進駐です。そして8月15日、市政治委員会から内地帰還輸送開始の発表でした。戦後、幾度となく夢にまでみてきた待望の内地帰還が真実となって、その喜び方は一通りではありませんでした。

9月11日、齊齊哈爾を後にした引揚げ集団は、翌朝第二松花江という駅で下車。ここから次の陶頼昭まで鉄道は不通。是非とも自力で歩かねばなりません。内戦中の国府・八路両軍の第一線で、その間約40km。9時間以内に通過せよとの指示。もし集団から脱落して取り残されたら、周辺の住民に襲われて身ぐるみ剥がされるとの達示です。夫は集団の小隊長を務めていたために、隊員の掌握、歩行区間の対策など、天手古舞しています。特に病気のご主人を抱えた家族もいる隊なので、病人移送の対応には頭を痛めていました。病人移送には4人の要員が必要ですが、こんな時は誰も他人の事など構ってはいられないのが実状なのです。それで夫が率先してこれに当たらねばなりません。故に我が家族の面倒までは手が回らず、勢い子供2人を私に押しつけました。引受けたもののそれからが大変。何しろ40kmの距離です。みんな必死で先を急ぎます。次々と追い越されると、心は焦るばかりで脚は動きません。背に負うた長男は重いし、肩は痛い。抱いた長女はむずがる。激しい渴きにいつしか水筒は空っぽ。息も絶え絶えに幾度座りこんだことか。でも、集団から離れたら住民に襲われるという恐怖感が懸命に歩かせました。ちょうど、猛獣に追われる羊の群れさながらの逃避行でした。

やっと陶頼昭に着いた時は、へとへとで恥も外聞もなく所構わず寝そべったものです。ここから屋根の無い貨車に乗せられ、このまま錦州まで行けるかと思ったら南新京で降ろされ、次は石炭車で奉天まで、そして錦州近くのコロ島で引揚げ船に乗ったのが10月18日。

22日、無事に佐世保上陸。24日、懐かしい故郷佐賀に親子4人揃って帰りました。これも偏えに周りの多くの方々、社会の皆様の暖かい御援助と励ましによるものと、深く感謝致したものでございます。

戦争では、内地外地を問わず、国民等しく多くの犠牲を払いました。また、近隣諸外国の皆様にも、さまざまな被害を与えて御迷惑をかけております。このように戦争は罪の無い人までも犠牲にしています。もう2度と繰り返してはなりません。ご免でございます。